



このところ徹夜が続いたり、うたた寝をしたりして。すっかり風邪がみでのどが痛んでしかたなかったが昨夜どうにもならず早い時間から着込んだままりクライニングの椅子で寝てしまった。しかしそれがよかったのか朝起きると喉の痛みがずいぶん引いて安心した。

今月はなにしろあわただしい。もうせっぱつまった仕事の工期が来ているが終わるはずもない量を抱えている。そんな中で父が急になくなって、4日ほどたくさんの人と会ったりとあわただしかった。ケニアのエイズ隊はみんな帰ってきて話を聞きに行ったり、バングラの報告書もあるし、町からは町会長をやれと使者が来たり、コンピュータが壊れたり、女たちは赤ちゃんが出来たの、結婚するだの、その他、その他とこん

なに忙しいのにちっとも金にならんのはどーいうわけだ。とぼやいてもまー仕方がない。

いつも思うのだがこう忙しくても毎日風呂に入って缶ビール的一本も飲めばまあ、何とかなる。これが風呂がなかったら困るだろうなと、書いている今も、もう10時半。何とか今日中には家について風呂でも浴びて一杯やって横になりたいものだが、そのまえに1時間のママチャリがある。一日に一回、体も心もゆっくりと開放される一瞬があるべきなのだ。

そんな重い日々が続いた朝、道を歩いていたら公園のケヤキが一せいに芽ふいていて、冷たさがわずかにゆるんだ風に細かく軽やかにきらめいて、見上げた朝の空が久しぶりに晴れて大きく広がっていた。久しぶりに心のひだが洗われるように清々しかった。

そうなんだなあ、大変だ大変だと騒いでみても今までやりたい仕事ばかりやってきたなあ。大体こんなに自由にきままにやっていていいんだろーか。貧乏するのも自由のうちだ。これもまたいつも思うのだが、いつ倒れてもいいと思っている。やりたいことはみんなやっているのだから心残りはないはずだ。ゆっくり休めるだろう。父が急にパタッと心臓が止まって、あわただしく走り回ったが、まったく悲しみはなかった。それは父からもらえるものはすべてもらってあったからだ。今までの年月で伝えたいことはすべてきているはずだし、人間の死亡率は100%なのだから。

父は多分モンゴルで馬賊になりたかったのだろうと今ふっと思い出した。確か、行こうとして長男であったために行けなかったはずだ。そのためか私がモンゴルに行くとき教えてくれたのは騎兵としての馬の扱いであり、片手軍刀術であった。父も気ままに生きてから貧乏であったが、私をしっかりと教育した。当時見渡す限りの田畑の中に建てた今の家を、屋根と荒壁の中に住みながら何年もかかって作り上げたことは私が受け取った大きなもののひとつであった。私も、井戸を汲み、薪を割りドラム缶の風呂を満たし、縁の下に潜り天井に上がり、鶏を追いかけて裸足の足がたくさん草で傷つき、仮囲いの便所を作り、肥桶をかつぎ、一生懸命に生きて。そして父はアル中になり暴れ、騒ぎ、おとなしくなり死んでいった。父は私にたくさんの荒々しいものを残して去った。

私は果たして子供たちに何を残してやれるのだろうか。父が私に言ったたくさんの言葉が生きるように、私の言葉は子供たちの中に生きていられるのか。このあいだ久しぶりに軍刀を抜いてみた。中学時代からさらしを巻いて素振りに使っていたものだが、これもまた年老いてみえた。すべてのものは去って行くのだが、言葉や命のきらめきは老いることがない。命は引き継がれていくところに救いがある。言葉が達するところと時間までが私の命だとよく思う。

私もまだしばらく気ままな時間を過ごしそうだ。さて11時を回った、今日は髭のニッカでもすすって帰ろう。帰って風呂だ。それで事足りる。一日のことは一日で足れりと誰かがいっていたなあ。

<http://www.interq.or.jp/japan/gnomes/gnomes1>

TEL/FAX03-5600-0195 高村 哲 GnomesJpn@aol.com

